

大野城市共働事業提案制度
事業進捗状況資料

リハビリ職員による訪問事業！
健康寿命延伸プロジェクト事業
(令和3年度)

リハビリ職員による訪問事業実行委員会

NPO 法人 FSA
大野城市すこやか長寿課 介護支援課
(令和3年度採択事業)

目 次

1. 提案時の状況と課題
2. 事業目的
3. 共働の必要性(提案団体と市の強みと弱み)
4. 事業スキームと役割分担
5. 実績と成果
6. 翌年度の事業内容
7. 将来展望
8. その他

1. 提案時の状況と課題

- (1)大野城市の要支援の被保険者等には、身体機能の問題が影響し、QOLの低下を認めているが、専門的な介入が届いていない人が存在していること。
- (2)通所介護施設の利用をしている要支援者等に対しては、施設側の画一的な運動指導にとどまっているケースがあり、個々にきめ細やかなサービスが行き届いていない部分がある。また、自宅における自主訓練までモチベーションが保てておらず、通所介護施設におけるケアだけでは、リハビリの習慣化につながっていないこと。
- (3)リハビリ専門職員が不在の通所介護施設では、職員のリハビリに対する知識や経験の少なさから、要支援者等への運動指導に苦渋しているケースも認められていること。

2. 事業目的

専門職の介入が届いていない要支援者等や、通所介護施設の職員に対して身体に関する専門的指導、自主訓練計画の立案、環境調整等を行うことで、大野城市の要支援者等の身体機能及びADLの維持・改善の評価を行い、健康寿命の延伸につなげることができるモデル事業を開発するもの。

さらに、このモデル事業を継続させるため、大野城市内等の施設等に勤務するリハビリ専門職のネットワークづくりを行い、本事業終了後の4年目以降は、それらのリハビリ専門職が本事業を担うことができるよう、本事業のマニュアル化を含む取組を行うもの。

3. 共働の必要性

(1)共働事業に至った経緯

令和2年1月に大野城市が実施した高齢者の生活実態調査では、普段の生活の中で、外出を控えている高齢者は約10%存在している。その理由の約半数は、足腰などの機能低下によるものとされており、高齢者の運動機能低下への対応策が求められているが、制度上の問題で、要支援の被保険者等の中には、専門的な介入が届いていない人が存在している。そのため、市では直接的な専門職員の介入を行うことができる団体を必要としている状況であった。

NPO 法人 FSA は、リハビリ専門職で構成された組織で、リハビリテーションを通じた社会貢献を目標に活動を行っており、上記課題の解決に向けた取組を行うことができる団体である。しかし、当団体において実施する場合、介入対象となる個人や施設を把握するための情報が極端に少ないという課題がある。大野城市は、介入対象となる個人や施設の情報を把握しているため、団体と共働で事業を行うことにより、効果的な事業実施が見込まれる。

また、団体のリハビリ専門職の介入を受ける要支援者等や、通所介護施設は市職員

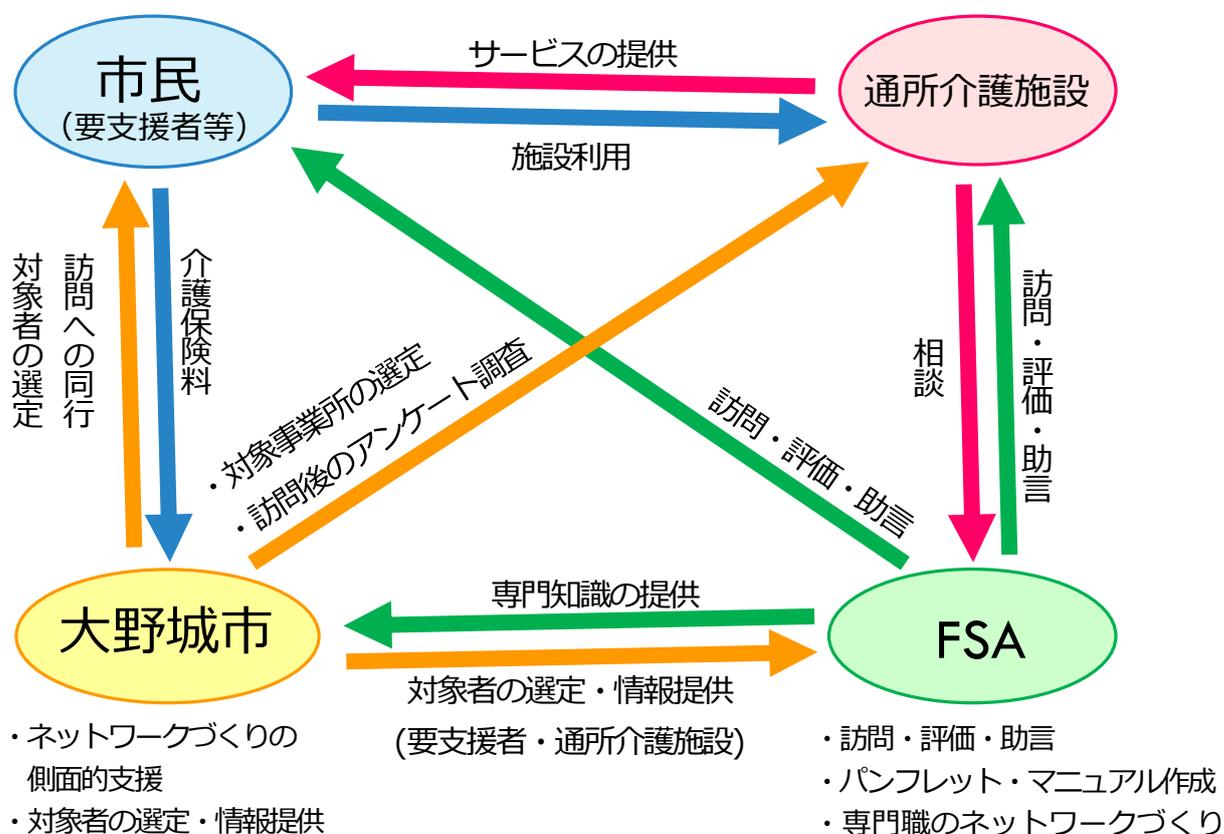
から事業の説明等を受けることによって、安心して受け入れることができ、円滑な事業実施が可能となる。

社会貢献への想いを持つリハビリ専門職の集まりである団体と、介護予防事業に取り組んでいる大野城市が共働することにより、地域に根ざした健康寿命の延伸につながるモデル事業を実施できる。また、FSA の強みを生かして、大野城市内等で勤務するリハビリ専門職に働き掛けを行うことで、事業に賛同するリハビリ専門職を本事業に参画させるネットワークができ、モデル事業が終了した後も事業の継続が可能となる体制を構築できる。

(2) 提案団体と市担当課の強みと弱み

	提案団体	市担当課
強み	要支援者等や、通所介護施設の職員に対して身体に関する専門的指導、自主訓練計画の立案、環境調整の実施ができる。	リハビリ介入対象となる個人や施設の情報を持っている。
弱み	リハビリ介入対象となる個人や施設の情報が少ない。	コミュニティの場に参加していない要支援の被保険者等や、リハビリ職員不在の通所介護施設の利用者に対する身体機能及びADLの維持・改善に向けた取組が不十分。

4. 事業スキームと役割分担



(1) 訪問・通所事業

身体機能や ADL の維持・改善のために、専門家の介入が必要とされながらも、既存の介護保険制度では十分にサービスが届いていない個人や通所介護施設に対して、大野城市との共働の下で、当団体のリハビリ専門職とケアマネジャー等が連携し、要支援者等の自宅や通所介護施設を訪問する。

団体のリハビリ専門職は、要支援者等に対しては、身体機能面の評価、問題点の抽出、自主訓練を行い、通所介護施設の職員に対しては、レクレーションの指導、相談への助言等を行う。適時、再訪にて評価を行い、当事業での介入によって個人や施設利用者の身体機能の維持・改善につながっているかを評価していく。

(2) モデル事業

団体にて実施する事業の対象者は、実数が限られているため、4年目以降に多くの対象者への担い手が増えて、大きな事業になることを見据え、モデル事業の開発を行う。そのために、対象者への介入方法、ケース(脳梗塞、関節疾患、骨折など)ごとの指導・評価方法などのマニュアルづくりなどを行う。

専門職のネットワークづくりについては、本事業の報告会の開催などの広報、個人的

なつながらによる働き掛け、市内の医療機関や介護施設を訪問しての働き掛けなどを行い、10名程度のリハビリ専門職を募り、当団体と共に事業を行いながら、事業自体のブラッシュアップを図っていく。共に事業を行うことにより、本事業終了後の4年目以降も円滑な事業移行・実施が行えるよう取り組む。

5. 実績と成果

(1) 事業実績(令和3年度)

i 事業全体

実施内容	詳細	
実行委員会	市・FSA	事業の方向性・事務処理等について確認
協議・ 打ち合わせ	市・FSA	随時(メール・電話)

ii 訪問事業

実施内容	詳細	
備品購入	市	訪問時に使用する備品の購入 (血圧計、体温計、パルスオキシメーター、メジャーほか)
対象者選定 シート作成	市・ FSA	対象者を選定するために必要な項目をまとめ、候補者を選ぶ際の参考資料とするためのシートを作成
訪問後 アンケート作成	市・ FSA	訪問後に事業内容をフィードバックしてもらうためのアンケートを作成
対象者選定	市	候補者4名を選定 (対象者は、通所介護施設へのアンケートにて、リハビリ職員の介入を「是非希望する」と回答した施設を利用している方を対象とし、訪問事業と通所事業の相乗効果が得られるよう選定) ※対象者の要件については、振り返り面談会時に協議済。
	FSA	介入の可否を協議
対象者決定	市・ FSA	対象者2名を決定 ※参考資料(P9)参照
訪問実施 (対象者①)	市・ FSA	(1)初回 ※令和4年1月17日 事前打ち合わせ後、対象者宅にて評価・運動指導を実施。 2週間後、4週間後に担当CM及びFSAより電話連絡。 (2)2回目 ※未実施 新型コロナ感染拡大により、介入延期。 現在は、電話連絡にて随時状況確認中。 今後の新型コロナの感染状況を見ながら、再度日程調整予定。

訪問実施 (対象者②)	市・ FSA	(1)初回 ※未実施 新型コロナ感染拡大により、介入延期。 今後の新型コロナの感染状況を見ながら、再度日程調整予定。
----------------	-----------	--

iii 通所事業

実施内容	詳細	
対象施設 選定・決定	市	1施設選定・決定 (通所介護施設へのアンケートにて、リハビリ職員の介入を「是非希望する」と回答した2施設のうち、受け入れ可能な1施設を選定し、決定)
訪問実施	FSA	つどい処せんだんにて実施 ※令和3年 12月 13日 (講義内容)①個別に合ったリハビリプログラムの提案 ②介助者の腰痛対策 (車椅子からソファーへの移乗方法など) 事前に施設からの聞き取りを行い、要望に応える形での講義・実技指導を実施し、施設職員 12名が出席した。 ※参考資料(P10)参照(施設職員から回収したアンケートを掲載)



座学



実技 (介助者の腰痛対策)



実技 (移乗方法)

iv モデル事業(マニュアル・パンフレット作成)

実施内容	詳細	
アンケート実施	市・FSA	地域包括支援センターのケアマネジャーと通所介護施設のアンケート作成・依頼・集計を行った。
マニュアル・パンフレット	市・FSA	アンケート集計結果を基に、マニュアル及びパンフレットを作成。今後、随時加筆・修正を行っていく。
事業報告会(オンライン)	市・FSA	ケアマネジメント調整会議助言者連絡会 ※令和4年2月28日 介護支援課主催の上記会議にて、15分程度、共働事業での活動内容を紹介し、周知を行った。

(2) 目標と成果

① 目指す事業成果

専門的な介入が届いていない要支援者等や通所介護施設を対象とした、高齢者の健康寿命の延伸に向けた、新たなサービスモデル事業の開発。

② 成果指標

成果指標	現状値 (R4.3月末時点)	目標値			
		令和3年度	令和4年度	令和5年度	計
【訪問】 身体機能の評価の結果、維持・改善がみられること	身体機能低下中	身体機能維持・改善			
【訪問】 介入後に自宅での運動等が習慣化すること	0件	2件	4件	2件	8件
【通所】 介入後に指導した取組を職員が実践すること	1施設	1施設	2施設	1施設	4施設
【ネットワークづくり】 事業に参画するリハビリ職員数	0人	0人	4人	6人	10人
【モデル事業構築】 ケースごとのマニュアル作成数	3件	3件 ※令和3年度以降は随時加筆・修正を行う。			

6. 翌年度の事業内容

(1) 訪問事業

令和4年度の目標値4件の達成に向けて、新たな対象者の選定等を行い、介入を実施する。

対象者の選定については、令和3年度と同様、要支援1・2及び事業対象者の中から選定することとする。

また、実施にあたっては、対象者等の理解が重要であることから、対象者及びケアマネジャー等に事業内容の説明を十分に行い、理解を得ていくこととする。

なお、新型コロナウイルス感染拡大時は、対象者宅への訪問ができない可能性があるため、電話による状況把握及び専門的指導を行うこととする。

(2) 通所事業

令和4年度の目標値2施設の達成に向けて、新たな通所施設の選定等を行い実施する。

対象施設の選定については、令和3年度と同様、市内の通所施設にアンケートを実施した上で、実施の意向を示した施設を選定することを基本とする。

また、令和3年度に1施設を実施した際には、実技指導や介助方法をもっと知りたいという声が多かったことから、限られた時間内で満足度が高い講義となるよう、内容を精査していく。

なお、新型コロナウイルス感染拡大時は、施設での講義が困難になることが予想されるため、オンラインでの開催も視野に検討する。

事業の周知・広報については、令和3年度に1施設を実施した際の施設職員アンケート結果では好評であったことから、これらの内容を掲載したチラシ等を作成し、市内通所施設の管理者に事業の周知・働きかけを行うこととする。

(3) モデル事業

i ネットワークづくり

2年目となる令和4年度は、市内に勤務するリハビリ職員の事業の参画を目指すことから、リハビリ職員が集まる場での事業の周知や個別の働きかけを行うこととする。

具体的には、FSA は学術発表会等で事業の周知を行い、市はリハビリ専門職が集まる会議等で事業の周知を行うとともに、個別に働きかけを行うことにより、事業参画を促していくこととする。

新たに事業に参画するリハビリ職員は、訪問事業や通所事業などの本事業に少しずつ関わっていくものとする。

ii パンフレット・マニュアル作成

介護予防のための運動等を掲載したパンフレット及び専門職の介入方法を掲載し

たマニュアルについては、ケースごとに掲載内容が異なってくることから、引き続きその種類を増やしていくこととする。

7. 将来展望

本事業終了後の4年目(令和6年度)以降は、ネットワークづくりを通して本事業に参画した市内の施設等に勤務するリハビリ専門職が、地域に根ざした事業として展開できるようになることが理想と考えている。実施方法は、派遣依頼や実行委員会方式等による市の事業として実施する。

しかしながら、本事業に参画するリハビリ専門職の人数が不十分であった場合には、委託方式による実施を検討することとしたい。

なお、委託方式となった場合においても、本事業で行う対象者の選定、関係機関との調整、パンフレットやマニュアルの活用などのノウハウは十分に生かすことができると考えている。

8. その他

通所介護施設への訪問については、座学と実技の講義を行い、大変好評であった。2回目も実施してほしいとの声もあがっているため、その他事業所に対しての訪問と併せて検討・調整していきたい。

個人向け訪問については、対象者2名を選出したものの、新型コロナウイルスの感染拡大により、1名の初回訪問のみ実施している。1ヶ月に1度の訪問を3ヶ月間行う予定であったが、3回の訪問を実施することを重視して、2名の訪問を完了できるよう取り組む。また、令和4年度の対象者選定についても進め、訪問を実施していきたい。

モデル事業のネットワークづくりについては、介護支援課が年に1度実施している、ケアマネジメント調整会議助言者連絡会(オンライン実施)にて、大野城市の事業所に勤務する専門職の方へ事業紹介を行った。

どの事業についても、新型コロナウイルスの感染状況に左右されるため、その都度、市と団体で協議を行いながら実施している。

対象者① ※初回訪問済

- ・90代女性
- ・介護度：事業対象者
- ・週1回デイサービスに通っている

(対象者からのニーズ)

- ・膝痛、腰痛を緩和したい

(選定の理由)

- ・体力・筋力の低下が見受けられる



市役所での事前協議 (市・FSA)

(介入後のゴール設定)

- ・体力・筋力の維持・向上
- ・転倒リスクの軽減
- ・対象者のニーズを果たすこと
- ・ADL※の維持・改善



対象者宅での聞き取り

◇対象者② ※未訪問

- ・90代女性
- ・介護度：要支援2
- ・週2回デイサービスに通っている

(対象者からのニーズ)

- ・腰痛の軽減と足腰を強くする

(選定の理由)

- ・体力・筋力の低下が見受けられる
- ・動作時におけるふらつきやバランス機能の低下が見受けられる



評価

(介入後のゴール設定)

- ・転倒リスクの軽減

※ADL＝基本的日常生活動作(Activities of Daily Living)

例. 歩くこと、階段の昇り降り、食事、排泄行為

通所事業施設アンケート集計結果【R3.12.13 つどい処せんだん】

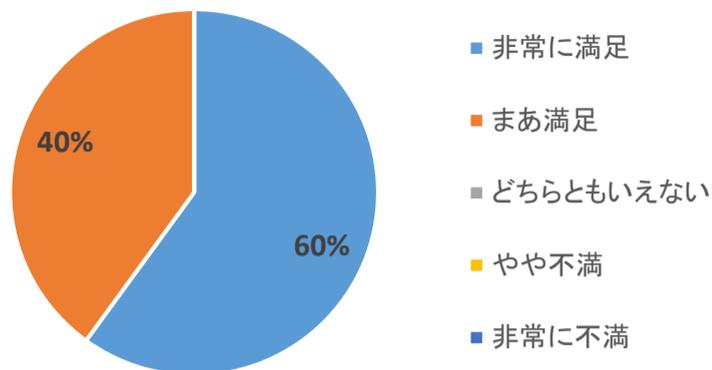
Q1 今回の研修の満足度について

1. 非常に満足	6
2. まあ満足	4
3. どちらともいえない	0
4. やや不満	0
5. 非常に不満	0

【理由(自由記載)】

- ・実技の時間がもう少し多く取れてたら良かった。(聞きたいことが沢山ありすぎて)
- ・質問にも実技を加えてきちんとお答えいただく等、とても勉強になりました
- ・前もって打ち合わせでニーズをきいて下さっていたので、ピンポイントな研修でうわべだけのものとなっていなかったのが良かった。
- ・2時間程ありましたが、短く感じ、実践してもらえ、とてもわかりやすかった
- ・すぐに実践できるような内容が多かった。
- ・実例のケースに対し、具体的に指導・提案して頂け、実践に活かせる。
- ・質問しやすい雰囲気。

Q1 今回の研修の満足度について



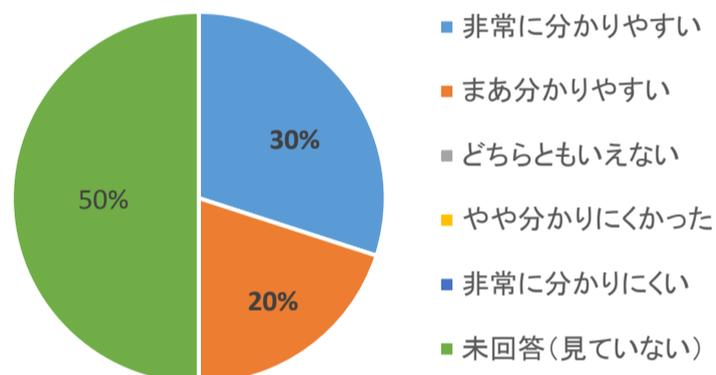
Q2 ガイドブックの内容について

1. 非常に分かりやすい	3
2. まあ分かりやすい	2
3. どちらともいえない	0
4. やや分かりにくかった	0
5. 非常に分かりにくい	0
未回答(見ていない)	5

【理由・改善点など(自由記載)】

※記載なし

Q2 ガイドブックの内容について



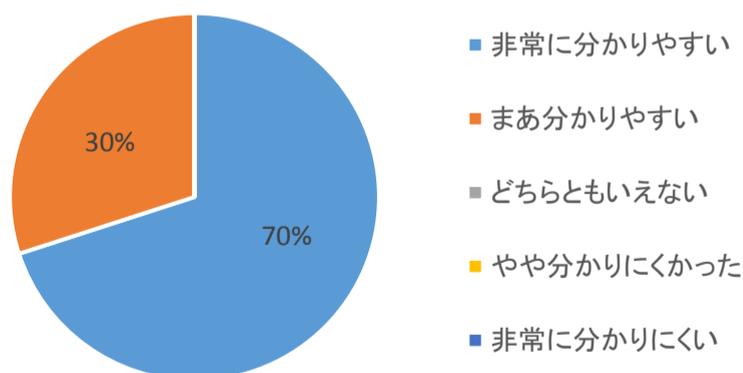
Q3 講師の話や資料の内容について

1. 非常に分かりやすい	7
2. まあ分かりやすい	3
3. どちらともいえない	0
4. やや分かりにくかった	0
5. 非常に分かりにくい	0

【理由(自由記載)】

- ・資料もまとまっており、わかりやすかったです。
- ・実技形式が入っていて良かった。
- ・話し方もわかりやすく、質問にも丁寧に答えて頂き、とてもわかりやすかったです。
- ・講師の方々が実践してある話や体験談も多く、資料も簡潔でわかりやすかった。
- ・訪問で関わる事がほとんどですが、アドバイスできる部分もあり、良かったです。ありがとうございました。

Q3 講師の話や資料の内容について



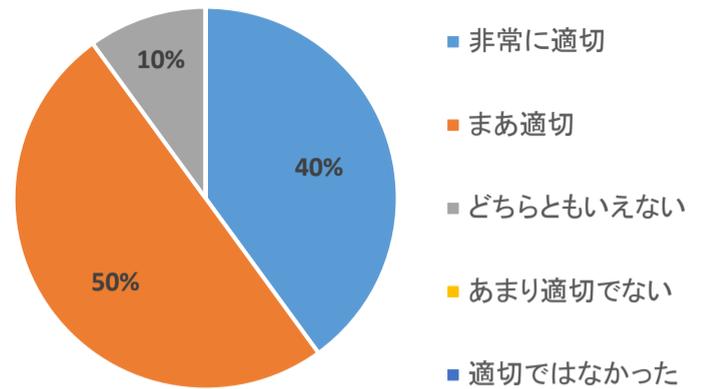
Q4 講義の実施時間の長さについて

1. 非常に適切	4
2. まあ適切	5
3. どちらともいえない	1
4. あまり適切でない	0
5. 適切ではなかった	0

【理由(自由記載)】

- ・時間は予定時間より過ぎていましたが、2時間程で丁度良いと感じました。
- ・時間がたつのが早く感じました。
- ・質疑の時間も多く良かった。もっと実技の時間があってもよい。
- ・あっという間でした。
- ・実践の時間がもう少しあれば良かったのかな?と思いました。

Q4 講義の実施時間の長さについて



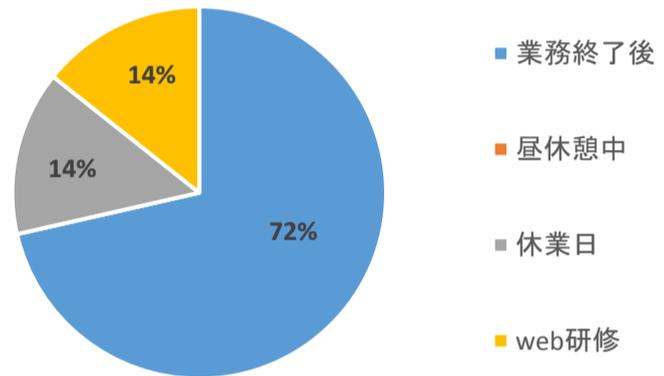
Q5 講義を受講しやすい時間帯について (複数回答可)

1. 業務終了後	10
2. 昼休憩中	0
3. 休業日	2
4. web研修	2

【その他(自由記載)】

- ・時間を気にせず出来るのは、業務終了後が良いかと思う。
- ・業務終了後に今回は開催して頂いたので、参加しやすかったです。
- ・度々に行える研修ではないので、短い限られた時間の中で深い内容でいくためにも業務終了後・休業日がよい。できれば休業日の方がよい。
- ・今日のように、業務終了後が今のところは受講しやすい。できればもう少し短時間で”今日はこのテーマだけ”などテーマを絞って実施し、回数を増やしていただけたら…。
- ・専門職の方の関わりは大きいなと感じました。各事業所との連携も取りながら、支援していきたいと思えます。

Q5 講義を受講しやすい時間帯について (複数回答可)



Q6 知りたい情報・要望・感想について

- ・今回受講した事で意識の向上又今後の考え方等の参考になりました。ありがとうございました。
- ・直接、介護を行っている場所、車イスからの移乗だけではなく、今日のようにソファへの移乗の方法で介助者の腰にも相手側にも負担がかからないやり方は、わかりやすかった。時間があれば、トイレ等の移乗やマシンを使用したトレーニング方法を一緒にできたらよかったと思う。
- ・講師の方も熱心に教えて下さる等、とても良い研修でした。有り難うございました。
- ・機械運動における、効果のある場所や具体的な方法、転倒予防に大切な運動と指導の仕方。
- ・かかえない、持ち上げない介護といわれていますが、マンパワーが減るなか、職員の年齢も上がり、福祉介助ロボットなどがあれば良いのだろうけど、まだまだ人対人だと思います。体に負担のかからない介助方法をエビデンスも含めて知識を正しく持ち、実施で学び、実行に移し、体を壊して離職などにならない様に自分の体も大切にしながら、人の体も大切にしていって、楽しい仕事につながればと思っています。
- ・実技指導が受けれてよかった。次回はご利用者さまと共に練習したいです。
- ・もっと実技を実際に見ながら教えてもらいたいです。
- ・新しい介助方法をもっと知りたい。他デイサービスの現状や取り組みなど。実践多めの講義、グループワークなど。
- ・できるかどうか定かではありませんが、今日思ったのは、やはり実際の利用者様に対し、どうアプローチしたらいいのか、専門家OT、PTさんの下、実践をしてみたいと思いました。指導してもらいたいなど。いろいろ裏ワザがあれば知りたい。

※受講者12名／回答数10名